

書評

〔評者〕
名郷直樹
武蔵国分寺公園クリニック



カルテはこう書け！ 目からウロコ「総合プロブレム方式」 内科学研鑽会 編

B5判 頁80 2013年
定価 2,940円(本体 2,800円+税5%)
[ISBN 978-4-88002-737-1]新興医学出版社刊

カルテについての本を読むのは多分2冊目、それも20年ぶり、それ以上というところだ。書評を頼まれなければ、おそらく読まなかっただろう。しかし読んでみて、これが意外に(と言ったらちょっと失礼か)面白いのである。例えばプロブレム命名の約束は、以下のようリストアップされている。

1. プロブレムは病気の呼び名である
2. プロブレムは名である名詞
3. プロブレムはひとつことの名
4. プロブレムはその名でよばれる「事実」
5. プロブレムは多義的曖昧さのない、ものの名
6. 社会・心理的問題を含まない

どうですか。めちゃめちゃ面白くないですか。私は10年ほど前から構造主義医療という枠組みの構築をしているのだが、それと真っ向から対立する。構造主義医療の立場では、プロブレムとは以下のようになる。

1. プロブレムは疾病の呼び名である
2. プロブレムは名である「コトバ」
3. プロブレムはひとつこととは限らない「コトバの束」
4. プロブレムはその名でよばれる「現象」
5. プロブレムは多義性曖昧さを含む、ことの名
6. 社会・心理的問題を含む

意外に自分の考えが整理されて驚く。しかし、当然のことながら、いざカルテを書くとなると、私の構造主義医療の枠組みでは、決してまともなカルテは書け

ない。指導医からは、もっと簡潔に書け、カルテは小説ではない、と言われるだろう。その対極で、この総合プロブレム方式に則れば、共通認識としてのカルテがとにかく書いてしまう。なぜか。

この2つの差異を考えると、臨床に役立つカルテを書くために、われわれが何を捨てているのかが浮き彫りになる。われわれが向き合っているのは、「病氣」であるし、名詞で表現されるような「ものの名」だ。あるいは多義性を許さない、曖昧さを排した「事実」。社会・心理的問題は排除される。そしてその排除の後に残ったもので、わかりやすい共通認識としてのカルテが書けるのである。

このプロセスで最も重要なところは、いらないものを捨てていくことである。このすがすがしいまでの捨てっぷりはどうだ。この捨てっぷりこそがカルテを書くことだと腑に落ちたのは、確かに目からウロコである。本書のタイトルにウソはない。

本書は、カルテの書き方という形式を通して、「プロブレム」というコトバのもつ深遠なる世界を明らかにし、臨床に対するゆるぎない「魂」とでもいうものを表現している。こう書いて思い出すことがある。たぶん小林秀雄の本居宣長に引かれた一節だ。

「姿は似せがたく、意は似せやすし」

魂は形式のなかにこそ宿るのである。本書をすべての医学生、臨床医に勧める。ぜひ皆さんも本書より「魂」を感じ取っていただきたい。